

「お前の全部、俺が
暴いてやる」——幼馴染の
消防士に、十年分の
思いごと組み敷かれて離し
てもらえません

唇を、奪われた。

同窓会の二次会。居酒屋の薄暗い廊下で、壁に背中を押しつけられている。

目の前にいるのは——十年前、毎日一緒に帰った幼馴染。

桐生陸。

百八十六センチの広い肩幅が視界を塞いでいる。昔の泣き虫の面影なんてどこにもない、日に焼けた逞しい腕が、私の横の壁についていた。

「んっ……♡」

深い。

大人のキスだ。舌先が唇をこじ開けて、有無を言わさず入ってくる。上顎をなぞられた瞬間、膝がかくんと抜けた。

鼻腔に飛び込んでくる匂いに、頭がぐらりと揺れる。

煙と石鹸が混じった、ほのかに汗の匂い。

知っている。十年前と全然違うのに、身体の奥が「陸だ」と叫んでいる。

「は……っ、ま、待っ——」

唇が離れたのは一瞬で、すぐにもう一度塞がれた。

今度は舌を絡め取られる。ちゅ、ちゅ、と濡れた音が廊下に漏れて、個室から聞こえる笑い声に紛れて消えた。

「——迎えに来た」

耳元で囁かれた声が、低い。

知らない声。子供の頃の陸はもっと高くて、よく裏返っていたのに。

これは——大人の男の声だ。

「りく……？」

「十年待った」

親指が私の頬を撫でる。厚い指の腹。硬いタコが擦れる。

「お前が来るの、ずっと」

「っ——」

心臓が壊れそうだった。

逃げた。

同窓会の個室に戻ることもできず、財布だけ掴んで店を飛び出す。

夜の空気が頬に冷たい。ヒールが音を立てる。どこに向かっているのか分からない。分かっているのは唇にまだ陸の味が残っていることだけ。

(なんで——)

信号が赤に変わって、やっと足が止まった。

肩で息をしている。心臓がうるさい。唇が熱い。

そして——太腿の内側が、じんわりと疼いている。

(なんで、こんな——十年も経ってるのに)

唇を指先で触れた。まだ濡れている。陸の唾液が混じった感触に、下腹がきゅうっと絞まる。

鼻の奥に残っている匂い。煙と石鹼と汗。消防士になったって、さっき同級生の誰かが言っていた。あの泣き虫の陸が、火の中に飛び込む仕事をしている。

身体が覚えている。この匂い——正確には、この匂いに似た何かを。

十年前。引っ越しの前日。

夏の終わりの公園で、二人でブランコに座っていた。

陸はまだ私より背が低くて、声が高くて、目が赤い。

泣いていた。私が引っ越すと聞いて。

「大人になったら迎えに行くから」

その声が、今も耳の奥にこびりついている。

「だから——待ってろ」

あの時の陸は汗だくだった。夕方の公園で、蝉の声の中で、汗と石鹼の匂いがした。

子供の匂い。

でも私はあの匂いを忘れられなかった。どの恋人と付き合っても、抱きしめられても、「この匂いじゃない」と身体が拒んだ。

(——馬鹿みたい)

信号が青になる。歩き出す。もうヒールでは走れない。

（子供の約束を十年も覚えてるなんて。社交辞令だったのに。きっと陸はとっくに忘れてて、さっきのキスだって——同窓会のノリか何かで——）

分かっている。自分に言い聞かせている。

認めたら——十年も片思いし続けていた自分が、惨めすぎるから。

（私なんかを好きになる人なんていない）

この呪いは、いつ自分にかけてたんだろう。

大学に行ってから、陸の連絡先を聞こうとした。でも共通の友人も散り散りで、携帯番号もSNSも分からない。

最初は探した。でもそのうち「向こうも探していないなら、やっぱりあの約束は子供の戯言だったんだ」と諦める。

二十二歳で最初の彼氏ができた。優しい人だった。一年で別れた。

二十五歳で二人目。半年で終わる。

理由はいつも同じ。

（この人じゃない）

比べている相手が誰なのか、自分でも認めたくなかった。

十年越しの片思いなんて、重い女の代名詞だ。そんな自分が惨めで直視できない。

だから「陸は忘れている」「あれは子供の約束だった」と言い聞かせて——

ぽつり。

頬に冷たいものが落ちた。

雨だ。

見上げた空は真っ暗で、ぽつぽつと降り出した雨粒が街灯に光る。

傘がない。走って帰るにはマンションまでまだ距離がある。

コンビニの軒先に逃げ込もうとした時——

「真白！」

後ろから、低い声が飛んできた。

心臓が跳ねる。

振り返ると、陸が走ってくる。上着もなく白いシャツ一枚で、もうびしょ濡れだった。

雨に張りついたシャツの下に、消防士の身体の輪郭が浮き上がっている。分厚い胸板、引き締まった腹筋、太い腕。

息が荒い。消防士の体力でも全力で走ってきたのが分かる。

「逃がさねえよ」

目の前に立った陸は、雨の中で笑わなかった。

真剣な顔。眉間に皺を寄せて、私を見下ろしている。百八十六センチと百五十八センチの差。見上げないと目が合わない。

「十年待ったんだ。お前が来るの」

「――嘘だよ。あれは子供の……」

「嘘じゃない」

遮るように言い切られた。

「同窓会に来るって聞いた時、やっと見つけたと思った」

陸の声が――震えていた。

「引っ越してから、お前の連絡先、誰に聞いても分かんなくて。名字変わったのかと思って焦った」

「変わってないよ……結婚とかしてないし……」

「知ってる。今日確認した。指輪してないの真っ先に見た」

雨が激しくなる。二人の間を水の幕が遮っていく。

陸の大きな手が、私の手を取った。

熱い。雨で冷えた指先に、陸の体温がじんわり染み込んでくる。

「消防士になったのは――お前を守れるようになりたかったからだ」

「――」

「弱えガキのままじゃ、迎えに行く資格もねえと思っ

た」

涙が出た。

雨と混じって、頬を伝っていく。止められない。

「嘘だ。そんな——私なんか——」

「お前なんかじゃない」

声が大きくなった。

「お前がいい。お前だけだ。十年、ずっとお前だけだっ

た」

声が震えている。

この人も——怖いんだ。拒絶されるのが。十年想い続けてきたのに、「社交辞令でしょ」と笑い飛ばされるのが。

私と同じだ。

同じだけ怖くて、同じだけ——焦がれていたんだ。

十年分の呪いに、亀裂が走る。

「——私も」

自分の声が、雨音に負けそうなくらい小さかった。

「ずっと、ずっと忘れられなかった」

言ってしまった。

十年間、誰にも言えなかった言葉。

陸の顔が歪む。泣きそうな、笑いそうな、壊れそうな顔。昔の泣き虫の面影が一瞬だけ覗いて——すぐに大人の男の顔に戻った。

抱きしめられる。

びしょ濡れのシャツ越しに、筋肉の硬さと体温が伝わる。

煙と石鹼の匂い。雨で薄まっているのに、それでもはっきりと分かる。

十年ぶりの——陸の匂い。

「部屋、行くぞ」

「……うん」

私は陸の手を握り返した。

＊

マンションの部屋に入って、玄関の鍵が閉まった瞬間——陸に壁へ押しつけられた。

さっきの居酒屋の廊下より、ずっと荒い。

「んっ……♡」

キスが深い。舌が奥まで入ってくる。口の中を舐め回される。唾液が混じり合う音が、静かな部屋の中でやけに大きく響く。

ちゅる……♡　じゅるっ♡

濡れた服が肌に張りついて冷たいのに、陸の舌が熱い。温度差に身体がぶるりと震えた。

「……シャンプー変わったな」

唇が首筋に下りて、鎖骨の窪みに吸いつく。

「あっ♡」

「昔はもっと甘い匂いだった。今のも好きだけど」

「お、覚えてるの……？」

「忘れるわけねえだろ」

ちゅう♡と音を立てて、鎖骨に唇の痕がつけられた。

「っ——いま、痕つけた？」

「消えるまで俺のこと思い出せ」

返事を待たずに、もう一ヶ所。首の横、耳の下。

じゅう♡

強く吸われて、頭がくらくらする。

「陸っ……待って、こんな見えるところ……」

「見えるところがいい。誰にもお前に手を出させたくない」

低い声が耳に直接流し込まれて、下腹に熱が溜まった。

独占欲。十年分の。

嫌じゃない。むしろ、おまんこの奥がきゅうっと甘く絞まる。

「上、脱がすぞ」